

スイートルーム改装

仙台国際ホテル

東武鉄道系の仙台国際ホテル(仙台市)はプライベートサウナを併設した1部屋1泊あたり25万円超のスイートルームを設ける。24日に改装工事に着手し、8月の稼働を予定する。消費電力の高い訪日外国人(インバウンド)や首都圏など域外からの観光客を取り込む狙いだ。首都圏から日帰り圏とされる仙台の宿泊需要のてこ入れを図る。

1億円超をかけて、現3室あるスイートルームをすべて改装する。サウナ付きの部屋は2つで、利用人数は1〜4人。2人利用の場合、1部屋あたりの価格は20万円台と25万円台になる。部屋での滞在時間を楽しめるようルームサービスによる夕食・朝食付きのプランを用意する。夕食にはホテル自家製のキャビアやブランド「仙台牛」などを入れ、朝食は現地の食材を使った料理、朝食にはホテル名物のパンや地産の野菜、ずんだもちなどの郷土料理が並び、現在は洋風の内装だが、改装により和洋折衷のデザインになる。宮城県の花「ミヤギノハギ」や日本三景・松島など訪日客に人気の高い「和」のデザインを取り入れる。食事をつけず、部屋のみ利用も可能だ。利用状況を踏まえ、サウナ設置を含む宿泊部門の高付加価値化に注力する。旅行や宴会需要が回復し経営状況が改善したところがある宿泊部屋の半分以上

サウナ併設、8月にも稼働 1部屋1泊25万円台に

とで、宿泊部門の見直しに乗り出した。一時は稼働率の向上も見込まれ、撤退したが、2023年4月に再開した。再開に合わせて、塩分濃度が低く魚卵本来の味を楽しめる自家製キャビアを用意するなどソフト面に磨きをかけた。24年3月期の売上高は18億円とコロナ前の8割ほどにまで回復し、下半期は営業損益は黒字に転換した。

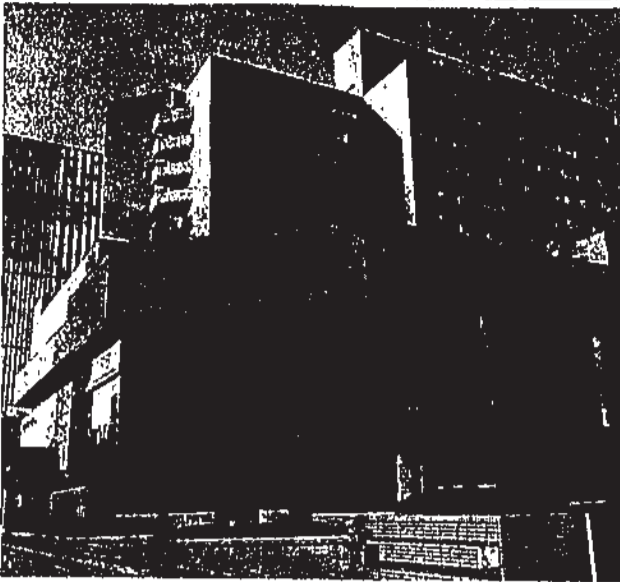
改装の最大の狙いは宿泊部門の高付加価値化による収益基盤の強化だ。一般的にホテルの売上高は宿泊・宴会・直営レストランが多くを占めており、その順に利益率が高いとされる。ただ、仙台国際ホテルの場合、建設時の制約などで234室ある宿泊部屋の半分以上

がシングルルームとなっており、宿泊部門が売上高の4割ほどを占めるものの旅行客の取り込みが課題があった。改装により宿泊部屋の稼働率の向上も見込まれる。現在のスイートルームは22年3月に起きた福島県沖地震で一部が破損し、稼働できていない状況だ。新型コロナ禍で売上高が半減するなど予算の制約があり、修繕に時間がかかっていたとい

う。仙台国際ホテルは今後、サービスと施設を武器に宿泊と宴会の2部門を経営の柱として強化していく。訪日客の取り込みとして、欧米やアジアに強みを持つインフルエンスサーを起用し、富裕層向けの団体ツアーを計画する。野口青男社長は「25年3月期は21億円の売上高、通期での営業損益の黒字転換を見込む。5年後の30年3月期には

営業利益1億5000万円を確保する目標だ」と話す。ただ、依然として東北の観光客の回復は鈍いのが現状だ。観光庁の調査によると23年の東北の延べ宿泊者数は19年比で14%減と全国を10区分した中で減少幅が最も大きい。キャッシュレス化や多言語対応などの遅れが要因とされる。東北の最大都市、仙台市は東京駅から90分ほどのアクセス

と日帰り圏内に位置するのも要因の一つだ。宮城県や仙台市では宿泊施策を強化する財源として、宿泊税導入の議論を進めている。宿泊につなげるため市中心部での夜市やライトアップなどのナイトコンテンツを構想している。自治体の動きは民間にも波及している。仙台国際ホテルの取り組みは他事業者の投資判断にも影響を与えつつ



仙台国際ホテルは現在3室あるスイートルームをすべて改装する

東北は宿泊者数の回復が鈍い

	2023年	対19年伸び率
北海道	3793万人泊	2.6%
東北	3748	-14.2
関東	1億8721	9.4
北陸信越	3909	-6.9
中部	5617	-10.6
近畿	1億746	1.7
中国	2563	-7.1
四国	1456	0.4
九州	5687	-3.1
沖縄	3030	-7.8

(出所) 観光庁宿泊旅行統計調査